

?幼女は緑 姉は紅?

ゆーしやKuro

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

カクカクシカジカで（いつもの）……メブが幼女になっちゃった!? 一体原因はなんなのさ……!? というかそんな身体でどうやって私を守ってくれるのさメブウウウー!!!（ノルマ達成）

原因不明の幼女化……勇者部で起こる様々なチヨメチヨメ的なあれ……そんなこんなで幼芽吹と姉夏凜のほのぼのの日常を書き記した勇者御記、始まります！

ばとるしーんもあります

シリアルですご安心ください（暗黒微笑）

※ゆゆゆいでの物語です。予定は無いけどもしかしたら袖リリとかがいきなり出てくる可能性もありますがそこはご愛嬌。……まあゆゆゆいわーるどだからなんとかな

r (勇者パンチ(結))

※圧倒的不定期更新。大満開も終わったけどオリジナルの修正が忙しいので許し

(勇者パンチ(嶋))

※上記で暗黒微笑してるけどそうそう重いことにはなりません。たぶん(勇者パン

チ(嶺))

# 目次

## 第一章《楠芽吹は幼女で章》

第一話【雀、絶叫ス——！】—— 1

第二話【雀、コケる——！（既視感）】

6

第三話【新しい日常の始まり】

21

第四話【それには確かに愛情が詰まっ

ていた】

27

第五話【幼体化の原因と出撃制限（夏凜

ちゃんの回想なのでシリアルです。ご安

心を☆）

43

第六話【星天ノ殃禍：新星逆襲 其ノ

二

第七話【星天ノ殃禍：新星逆襲 其ノ

二・決】

57

第二章《三好夏凜は姉で章》

第八話【雀、絶叫ス——！（そして爆

誕☆姉夏凜）】

67

第九話【脳内に響く警報音】

75

本編とは全く関係ない閑話（筆者の暴

走とも言う）

82

第十話【月に叢雲、花に風】

87

第十一話【罪の重さを背負う乙女】

94

第十二話【狂花】

101

第十三話 【うわあああやったあいつも  
のメブだ!?!】

---



## 第一章 《楠芽吹は幼女で章》

### 第一話【雀、絶叫ス——!】

——それは、夜の樹海で起こった出来事。最初に気付いたのは防人・加賀城雀だった。この日、勇者達は侵攻してきたバーテックスをいつも通り、巧みな連携で難なく撃破し、巫女達が待つ部屋にいざ戻らんとしていた時だった……。

「うぎやああああああああああああ  
!!!??? どうしちゃったのさメブー——!!!」

聞き慣れた絶叫が樹海に響く。

「全くうるさいですわね……今日の叫びノルマは既に達成しているでしょうに、一体芽吹さんがどうしたと——ひよえああああああああああ!!!」

「うるつせえな!! ちよつとは静かに叫びやがれツ!」

と、シズクが叫び声をあげた雀と夕海子に怒鳴る。『静かに叫ぶとは?』と雀は一瞬ツツコミそうになったが、また怒鳴られそうなのでここはグツと堪えた。

「あー、その3人、声音は同じくらいじゃないかにやあ……」

「全くね……ってええええ!!? め、芽吹!？」

ツツコミを入れた雪花は隣で夏凜が叫ぶのを予測していたようで、サツと耳を塞いで苦笑いをした。

「こ、これは……あの伝説の幼体化現象っ!？」

「そ、園子先輩! これは何やらしい予感がっ!？」

「行くよそのつち! メモの貯蔵は充分か!？」

「あいあいささ♪」



チヨメチヨメモNo. 590を取り出した園子ズは、戦闘中よりもキレのあるスピードで芽吹の状態をメモし始めた。身長からして、小学校低学年か、園児レベルまでになっている。サイズが合わなくなった防人の戦衣に埋もれ、周りを見渡しながらわたたたとしている。精神的にも幼児になっている可能性が高いだろう。

「きゃあ〜♪ 芽吹さんかわいい〜♪」

「あんずう……タマ、少しは自重した方がいいと思うゾ」

「園子ズ、お前達もだ」

「「しゅん……」」

球子、若葉に言われ、杏と園子ズはしよんぼりした顔で一步後ろへ下がった。

「め、芽吹？ 私のこと分かるわよね？ ほら、えっと……ライバルで、その……ええつ

と!？」

焦りを隠せない夏凜がそう言いながらこんがらがった脳内を整理する。

「……………？ おねえさんたち、だれ……………ですか？」

「め、メブウウウウ!!! こんなか弱い体になっちゃったらどうやって私を守ってくれるのおおおおお!!!」

「や、やめろ加賀城！ ちっこい楠に泣きついて……………絵面が半端じゃねえぞ!!」

相手は芽吹であるが、客観的に見ると幼女に泣きつく雀の姿がそこにあった。

「そ、そそそそんなことととよりもでつ、ですわ!! この状況、一体どうすれば!？」

「皆さん落ち着いてください！ ここは敵地、まずは一度部室に戻しましょう！」

「そ、そうだな須美！ あたしら先に帰ってひなたさん達に伝えてきます！」

「フツ、この状況でも冷静で、迅速かつ適切な対応……流石ね。弥勒も同行するわ」

そうして、動揺を隠しきれない者と、それを見て逆に冷静さを取り戻した者に分かれた勇者達は急いで帰還したのだった——

## 第二話【雀、コケる——！（既視感）】

樹海化が解け、一足先に部室に帰還していた銀、須美、蓮華と着いてきた夕海子は、仲良く談笑していた巫女達に事を話す。

「……というわけで、かくかくしかじかなんですよ！」

「なるほど……まるまるうまうま……大変なことになってしまいましたね。とりあえずお茶でも飲んで落ち着きましょう……」

「ひなたさん、それサイダーっス……」

「いっふっ!？」

銀から話を聞いた上里ひなたも相当動揺しているようで、湯のみの緑茶と何故かそこにあつた炭酸飲料を間違えて飲んでしまう。予期せぬシユワシユワ感に、思わず吹き出

してしまつたひなたに藤森水都が慌ててハンカチを手渡す。

「ふ、ふう……水都さん、ありがとうございます」

「い、いえいえ！ それより、これからどうするかを考えましょう！」

「一度話し合った方が良さそうですね……」

「事は重大……大赦の協力も仰ぐべきね。まあ弥勒が居るのだから、解決は間違い無し  
よ」

「さすがご先祖様ですわ！ もしや既に原因が何かわかつて……う？」

夕海子の言葉に、蓮華はフツと笑うと髪をなびかせて一言……。

「いえ、さっぱり」

「ズコーツ！ 帰ってきた途端これだよ！ 蓮華さんは相変わらずだね!」

後を追って帰還してきた雀が、部室の扉の前でコケる。

「わからないものはわからないわ。でも予測は可能。敵による攻撃が原因と見ていいと思うわ」

「……楠、今日は被弾してない」

「……………」と、言われることも予測済み。きっと樹海に実った果実を食べて……」

「ご飯食べた後だったから、それもない」

「……友奈、弥勒の頭を撫でる権利をあげるわ」

「おー、よしよし……こんな日もあるよレンち」

蓮華の“予測”は、芽吹をよく見ていたしずくの証言により潰えた。雀と同じく帰還した赤嶺になだめられる蓮華に、夕海子はどうすればいいのかわからず、あわあわとする。

「んー、やっぱり私達だけで考えても仕方ないよ。みんなが戻ってくるまで待ちましょ」  
少し考え、真鈴はそう提案する。

「安芸先輩……上級生っぽいことも言えるんですね」

「もー花本ちゃん！ 上級生っぽいじゃなくて上級生っ！ アタシ歳上！」

真鈴にそう言われた花本美佳は、一言。

「初耳です」

「ええっ!？」

「そんなことより、どうやら皆さん帰ってきたようですよ。まずは芽吹さんの状態を見て……」

「そんなことつて、上里ちゃんまで?! うう……国土ちやくん!」

巫女2人に適当な扱いを受け、最後の希望である国土亜耶に泣きつく。

(ああ……さっきの私もこんな感じだったのかあ……)

その光景を見て、先程同じようなことをしていた雀はそう思い、恥ずかしさから手で顔を覆い隠す。

「な、なんですの雀さん。芽吹さんのことですからその程度のあやし方では満足していただけないかと」

「ちっがうよ!!! 過去の自分を恥じていたんだよ!!!」



雀が思わずそう叫んだ瞬間、部室の扉が開かれる。残りの勇者達が帰ってきたようだ。

「すずめ、だまりなさい」

「おお！ メブ戻ってえ……ないッ！ まだちっこい！」

「次は『小さくないもん、まだ成長期だもん』って言うんよ」

「なっははは!!」 なんやソノの差し金かいな！ それにしてもホンマにちっこくなくてもうて……ああ、あかん……これが母性っちゅーやつかあ」

園子（中）の耳打ちに、静は大笑いしたあと幼女となってしまった芽吹の頭を撫でる。

「ちいさくないもん、まだせいちゅうきだもん」

「“ちゆう”やなくて、“ちよう”やで。それともお姉さんとちゆうするか？ あ、ごめん今のは無しや。無しやから、そんな険しい顔せんといて！」

「演技派女優の名残……もしかしてこれはチャンス……」

杏はじつと芽吹を見つめ、笑みを浮かべる。

「杏さん？ チャンス……ではありませんよ？」

「あ” つつ、な、なんでもないです！ ハイ……」

ひなたの庄に負け、杏は球子の後ろに身を隠した。全然隠れていないが。

「カラー！ 全員静粛に！ この《楠芽吹幼児化事件》についてみんなで話し合うわよー

！ 東郷、記録！」

「はい、任されました」

風に指示され、東郷はパソコンの前に座る。他も風に注目し、緊迫した空気が生まれる。

「のあああ!?! こら、芽吹！ 髪を引っ張らない！」

緊迫した空気は何処へやら。雰囲気をぶち壊し、夏凜の声が静かになっていた部屋に響く。

「かりん、にぼしくさい……！」

「く、臭くないわよ!! ……え、臭くないわよね友奈?！」

「だ、大丈夫だよ夏凜ちゃん！ いい匂いだよ！ にぼしとか……サプリとかの！」

「サプリのニオイって何よ!?! いや、とかどうして芽吹は私の膝の上に座って——」

「……いや……ですか？」

「んぐ……っ、い……良いわよ……！ 別に……減るものじゃないし」

「……ぞとばかりに瞳をうるうるさせさせた芽吹に、夏凜は頬を紅くさせて顔を逸らしながら言った。

（相変わらずチョロいわねー）

（チョロいです夏凜さん……）

「あ、あんた達ね……口に出さなくても何思ってるのかその顔見ればわかるのよ……！」

「はいはい、あんまり騒ぐとハゲるハゲる」

「だからハゲないわよ!! ——はあ……もう、さっさと始めなさい！」

息を切らしながらツツコミを入れた夏凜は、膝に座る芽吹が落ちないよう両手でガードしながら一息ついて言う。

「んじやまあ、何故か夏凜に一番懐いてる芽吹の状態と、今後どうするか話し合っていくわ。まずは第一発見者の雀、前へ」

「は、はいっ！」

勢いよく立ち上がり、雀は黒板の前に立つ。

「え、えーつと……もうバーテックスも倒し終えて、さあ帰るぞーって思ってたメブの後に着いていこうとしたら、もう小さくなってました！」

「私は戦闘中、芽吹見てないんだけど……まだその時は幼児化、幼体化にはなっていないかったのよね？」

「ですです。今日だっていつも通りでした！ 小雀の証言は以上でっす!!」

そう言ううと雀は卒業式でもやっているかのように綺麗に着席した。

「うーむ……確か夜の樹海には果実が実ってるけど、芽吹はそれ食べてないのよね？」

「うん。お昼ご飯の後だったし」

全員がうーんと唸り、その後もいくつか意見が出たが……原因不明、というのが話し合いの結果だ。今回、敵から攻撃を受けておらず、幼体化する原因となりそうなものにも触れてすらいない。戦闘前、戦闘中はいつも通りだったそれぞれの証言が出ている。完全に迷宮入りだ。

「一先ず、この状態の楠さんを一人にさせるわけにはいかないでしょう？ 誰が面倒を見るの？」

「そうだよね、やっぱり防人のみんなに預けた方が安心なのかな？」

千景がそう言うと、高嶋は防人組に視線を移して言った。  
確かに、芽吹をよく知る防人組なら任せられ……

「えっ、メブのお世話とか絶対無理。ムリムリ。うん、小雀に子守りはさせない方がいい  
ようん」

「ならばわたくしにお任せあれ！ 紅茶を用意して差し上げますわ！ それにアルフ  
レッドも居ますので問題はありません！」

「自信ない……」

「わ、わたしが芽吹さんのお世話なんて……いいのでしょうか？」

ここで恩を売っておこうと言うのかと思っていた雀は拒否。これは幼女に怒られそ  
うだからというのが本音だ。しずくと亜耶も自信なさげで、そんな状態で押し付けるの  
は如何なものかと風は考える。夕海子は自信ありげだか……言っではなんだが、正直一  
番不安なので風の中で論外となった。

「……うん。そうね。そういえば夏凜も芽吹と長い付き合いよね」

ということで、風はニツコリと笑いかけて夏凜に言う。その言葉に察した夏凜はカチンと硬直し、冷や汗をかいて風の目を見る。冗談では無さそうだ。

「え……えっと、確かに付き合いは長いけど……」

「それに夏凜、一人暮らしよね。部屋も広かったし」

風は笑顔のまま、夏凜にずっと顔を近付ける。

「そ、それはそうだけど……」

「あとなんか夏凜に懐いてるみたいだし、はい賛成の人は挙手！ うんうん、満場一致ね！」



「私が賛成してないんだけど!？」

「いやほら、芽吹本人が手を挙げてるしさ？　ここはお願い出来ない？　別に全部任せ  
るわけじゃないし、私達も定期的に様子見に来るからさ」

「……あーもう！　仕方ないわね……わかったわよ！　やればいいんでしょ!?　完成型  
勇者・三好夏凜……何がなんでもやってやるわ!」

「チヨ r……良かったわ」

「——ん？　今チヨロいって」

「イッテナイデスヨー。じゃあこれで終了！　みんな解散っ!」

少し早口でそう言った風は、1人先に部室を出ていった。

「な、なんか……してやられた気がする」

「……？　かりんといっしょにすむの？」

「……ええそうよ。まあ小さい子のお世話つていつても幼稚園の手伝いと似たようなものだろうし、きつと大丈夫よね……あんたはあんたで元に戻る方法探しなさいよ？」

「うん、どりよくする」

「今も昔もあんまり変わらないものね……」

芽吹を見てそう言った夏凜は、今後の生活を想像して大きなため息を吐いた。芽吹が元に戻るその日まで、夏凜の奮闘は続く。

## 第三話【新しい日常の始まり】

日も暮れ……というより、中立神の力によりこの時間帯は既に夜なのだが。月が海を煌めかせる。幼くなった芽吹の手を引き、夏凜は帰宅した。途中、買い物も済ませたのでレジ袋にはコンビニ弁当が夏凜と芽吹、二人分入っている。ちなみに焼き鮭だ。

「ふう、ただいま〜つと」

「……！ ただいま」

夏凜の真似をして芽吹は部屋に入る。

「今日はコンビニ弁当で我慢しなさいよ」

「かりん、りょうりできないの？」

「でっ！ でで、出来るわよそれくらいっ!! 今日はその、急にこんなことになるなんて思ってたから! あれよ、食材がないの!」

「さつき……かいものいったのに?」

「ぐっ、鋭いわね……とにかく今日はこれ。明日は……頑張ってみるから」

「うん!」

満面の笑みで頷いた芽吹は、弁当の蓋を開けて割り箸を割る。少々歪に割れたが、それを気にすることなく握って焼き鮭をつついた。

「こら、食べる時はちゃんといただきますす」って言うのよ

「あ、いただきますすっ!」

「全く……いただきますす」

勢いよく食べ始めた芽吹を見て夏凜は微笑み、自分も焼き鮭弁当を食べる。しかし、内心は不安でいっぱいだった。

（見たところ記憶がない……のよね。かろうじて名前は覚えてるみたいけど……）

元氣そうに見えるが、以前の記憶が無くなっているということは、最初、全く知らない場所で、全く知らない人に囲まれて、芽吹は相当不安だったはずだ。だがそんな中で、まず自分に懐いてくれたのだ。なら、出来ることをしていこうと、夏凜は強く思う。

「——じゃあ改めて。あんたの名前は楠芽吹、私の名前は三好夏凜。これからいろいろ決めていくわ！」

夕飯を食べ終え、テーブルに紙を広げた夏凜が真剣な眼差しで言った。

「なにをするの……？」

「芽吹、こんなにちっこくなった以上、樹海化しても戦わせる訳にはいかない。だから巫女と……えっと、ひなたお姉ちゃん達と、一緒にお留守番をするの」

幼女化以降、変身者である芽吹に異常が発生したためか、勇者専用端末も何らかの不具合が見つかり、起動不能となっていた。今は恐らく、ひなたが預かって大赦に届けてくれたので修復中だろう。

「それで、お留守番中は巫女のお姉ちゃん達と仲良くね」

「どうすればなかよくなれる?」

「そうね……じゃあとりあえず——」

夏凜は教えた。自身が持つあらゆる知識を。子供がそんなにいつぱん覚えられるのかとも思ったが、芽吹はすんなり覚えてしまった。

\* \* \*

風呂場にて、夏凜は芽吹をバスチェアに座らせて髪をしつかり泡立たせる。小さな身体は弱々しく、鍛錬で付いた傷痕なんかひとつもない、綺麗な白い肌だ。

「少し我慢してなさいよ。シャンプーハットなんてないんだから」

「ん」

ギョツと強めに目を瞑った芽吹は、身体を強ばらせて洗い終わるのを待つ。

「わしゃわしゃ……痒いところはない？」

夏凜がそう聞くと、芽吹がこくこくと頷くのでシャワーを手に取り、お湯で泡を流す。

「明日は——って金曜日か。なら明後日ね、イネスに行けばいろいろ揃えられるはず

……つたく、なんで私がこんなこと。東郷辺りに頼めばいいよ……いや、幼少期に国防教えこまれたら困るか、戻った時どうなるかわかったもんじゃないわ」

「……ありがとう、かりんお姉ちゃん」

「……そ。じゃあほら、流し終えたんだからお風呂に浸かってなさい。私も身体洗いたいんだから」

「うんー」

幼女となつてしまつたが、見た目に芽吹の面影を感じる。だが、少し素直すぎる芽吹に、夏凜はもどかしくも思う。

(でもまあ、たまにはこういうのも悪くないか)

お湯でバシャバシャと遊ぶ芽吹を見て、夏凜はフツと静かに微笑んだ。



## 第四話【それには確かに愛情が詰まっていた】

「芽吹く、そろそろ……つてどこをどうしたらそう着るのよ！ あくもう仕方ないわね！」

夏凜は慌てて、パーカーをゴチャゴチャに着ていた芽吹を脱がして着せ直す。幼い頃の服を残しておいて良かったと思う。芽吹が小さくなったことでサイズの合う服がなかったのだ、とりあえず銀の体操服を借りていたのだが、さすがにいつまでも借りる訳にもいかないのが今日、買いに行くことにしたのだ。

『今から出るわ』つと……さ、行くわよ芽吹！』

「どこ行くの……？」

「イネスよ、昨日須美ちゃん達と約束したから……あんたの服とかいろいろ買い揃えるの。何が欲しいのか考えときなさい」

「わかった！」

夏凜自身、一体どういう服を選べばいいのかわからない。だから応援を頼んだのだ。待ち合わせ場所兼目的地であるイネスへ、夏凜と芽吹は向かった。

\* \* \*

「いえーい!! イネスっ!!」

「これから〜? 芽吹ちゃん先輩の〜? コーディネートをしちゃうんだぜ〜!」

「もう2人とも、芽吹さ……ちゃんに、挨拶しなきゃダメよ」

「ああそっか。今日はよろしくな芽吹! って、こんな感じでいいのかな?」

「ん、親しみやすいほうがいいと思うんよ。芽吹ちゃん先輩、よろしくね♪」

「ええ、きつと似合う服を見つけてみせるから期待していて！」

銀、園子、須美の3人は芽吹を安心させるため、くだけた感じで接する。芽吹もそれを見て心を開いてくれたのか、3人の輪の中に入っていった。

「大丈夫そうね」

「さすが勇者ですね！ 夏凜さん♪」

「揃いも揃ってお人好しというか……って杳!? いつからそこに!?!」

「まあまあ、そんなことより早く行きましょう！ 芽吹ちゃんの服……あゝ♪ どんなのにしようかなあゝ♪」

「な、なんか1人だけ目的が違うような……」

何故かそこに居た杏のことはとりあえず置いておき、夏凜達は早速イネスへ突入した。

「——きゃあ〜！ すっごい可愛いよ芽吹ちゃん♪」

「わ〜そんな鼻血の出し方する人久しぶりに見た〜」

「そう……これはもう芽ではなく花よ！」

「何言ってるのか全然わかんねえよ！ あーもう夏凜さん！ って夏凜さん!?!」

「お茶碗もお客さん用のじゃアレよね……布団はさすがに自転車には乗らないし……カパーにして、それから……」

「す、すっごい主婦っぽくなってる……なんだかんだ言っただけで心配だったんすね」

「そつ、そんなことないわよ！ ほら、銀もどれがいいか意見を頂戴！」

杏の着せ替え人形と化した芽吹はされるがままで、夏凜も芽吹の使う食器等を選ぶのに夢中になっていた。

「ふう〜いい服見つかってよかったね！」

「ありがとう杏お姉ちゃん」

「くはっ！ ど、どういたしましてえ♪」

恐らく「お姉ちゃん」と呼ばれるために来たのであろう杏は、成し遂げたような顔で撃沈した。芽吹の服は三着ほど選んだので、とりあえずこれで一安心だ。

「……うん、よしっ！ 買い忘れはなさそうね。それじゃあお会計に——」

「買い物カゴを見て最終確認をした夏凜がそう言った瞬間……警報が鳴り響いた。その音に驚いたのか、芽吹はビクツと身体を震わせて夏凜にしがみつく。

「あ、大丈夫よ芽吹。園子ちゃん達は芽吹をひなた達のところに送って！ 杏、私達で先攻するわよ！」

「……夏凜お姉ちゃん、また行くの？」

「安心しなさい。こんなこと、この三好夏凜にかかれば造作もない。一瞬で殲滅してくれるわ！」

「……う、うん」

不安そうに頷いた芽吹に向けて笑みを浮かべ、夏凜は杏と共に敵地へ向かう。

\* \* \*

樹海——敵は星屑数百、中型が5体に大型が2体。かなり大規模だ。

「杏、援護任せた！」

「了解です！」

杏は矢を放ち、周りの星屑から殲滅していく。杏が作った中型への道を夏凜は進み、刀を投擲する。

「早く戻らないといけないんだから、退きなさいバーテックス共ツ！ ヤアアアアツ!!!」

夏凜がそうして中型を1体討ち、次の標的へ向かう頃、勇者達が集結していた。

「へくちっ！ おかしいわね……誰か噂してるのかしら？ はっ！ まさか私の女子力に気付いた男子が……!?!」

「風先輩！ 風邪なら無理しないで下がっていきなさいね！」

「あつ大丈夫ですはい。大丈夫だから友奈！ 押さないで……つて、あひゅう!!？」

「へ？ あつ!? わー!! 風先輩がふにゃふにゃにー!？」

結城のゴッドハンドによるツボ押しが発動したのか、風はその場に溶けるように倒れ込む。顔はどこか幸せそうだ。

「……多いな……」

「ノープロブレム！ いつも通り、手早く終わらせましょう！」

「そこのお二人さん、我らの部長が大変なことになってるのに冷静ね……」

「風なら……大丈夫だ……」



「信頼高っ！ んじゃあ早く終わらせて駆けつけるためにも、こつちも行きますかにや  
」

「レッツゴー！」

棗、そして歌野と雪花が夏凜に続き、中型へ突撃する。杏と合流した遠距離組の東郷と須美は、他の勇者達が戦いやすいよう、邪魔になる星屑を確実に仕留めていった。大型バーテックス……ドリフオロスとスコープピオン・バーテックスも難なく撃破。全く問題なく戦闘を終えるのだった――。

「あー！ー怖かったよおおお！！！！  
やっぱりメブが居ないと私死んじやうって！！！！」

「……加賀城、うるさい」

「えー守ってよしずくうー！！！！」

「あ?」

「あつ、シズク!? すみませんすみません……でも守つてよおおお!!」

「どわっ!? だからうるっせえよ!!!」

しずくがシズクへ変わった瞬間、ペコペコと頭を下げる雀だが、尚もシズクに泣きつく。それほどまでに芽吹が戦えないという状況に危機感を覚えているのだろう。

「私、先戻ってるわ」

「あ、夏凜く！ 今夜アタシが夕御飯作りにいこつかく?」

「遠慮しとくわー!」

「え、遠慮された……!?!」

「お姉ちゃん！ ごごによごによ……」

「あ、あーなるほど。頑張んなさいよー!!」

風の応援に、夏凜は手を振って返した。一昨日、芽吹に料理を頑張ってみると言っておいて、実は昨日、何度かバーテックスの襲来があったこともあり、完全に忘れて買い物をしてしまったのだ。芽吹の機嫌を損ねてしまったので、今日は服などの買い物として、子供が好きそうなハンバーグでも作ろうかと思っている。

\* \* \*

一方、勇者達が戦闘中……勇者達の帰還を待つ巫女達と共に居た芽吹は――。

「よろしくお願ひします。楠芽吹です」

「よ、よろしく」

きちんとお辞儀をして自己紹介をした芽吹に、水都は困惑気味に答える。

「……………」

「ど、どないすんねん。今日もえらいピシーツと静かに座ってるで……………」

「そ、そんなこと言われても……………！ あーそうだ！ 花本ちゃんに任せよう！」

「はあ!? あ、こほん。無理ですよ、この状況で楠さ…芽吹ちゃん……………」を、笑わせるなんて」

コソコソと小声で話し合うのは静、真鈴、美佳だ。毎回緊張がほぐれないのかずつと椅子に座っている芽吹を笑わせようとしているのだが……………とてもふざけていい雰囲気じゃない。

「ですが硬くなりすぎてても困りますし……」

「で、ですよね……いつもお茶しながらみんなを待つてる自分が恥ずかしくなってきました……」

「ぐぬぬ……あかん！ こんな静かな空間耐えられんつ！ 桐生静、名前とは真逆に行  
くで——!!!」

そう言つて、静は芽吹の前に仁王立つ。息を大きく吸い込み、渾身のギャグを放つ。

「布団がツ！ ふつつつ飛んだああああ!!!」

「風お姉ちゃんが居ないのに……?」

「ぶはっ!! ま、まさかの返し!?!」

と、まさかの返り討ちにあつた静は必死に笑いを堪えるが、耐えきれなかつたのか数

秒で吹き出した。

「め、芽吹せんぱ……ちゃん！」

「亜弥お姉ちゃん……？」

「ひやつ、はい！ あ、じゃなくて……何か食べる？ お菓子いっぱいあるから遠慮しないで食べていいんだよ？」

そう言つて亜弥は、芽吹が幼くなつてどう接すればいいのかわからなかったが勇気を振り絞つてお菓子を差し出す。しかし、それを見た芽吹は椅子から降りて、頭を深く下げた。

「今日は夏凜お姉ちゃんがご飯作つてくれるから、ごめんなさい」

（（あつ、ご馳走様です——）（））

巫女一同、微笑みながら心の中でそう思うのだった。

「今度は、お菓子食べるね！」

「う、うん！ みんなでお茶しようね！」

こうして、芽吹と巫女達との距離が縮まってすぐに夏凜が戻ってきて、途中だった買い物も無事済ませて、小学生組ともお礼を言って、夏凜と芽吹は我が家へ帰ってきた。

「ふう……さあ完成よ！ 名付けて、『完成型勇者ハンバーグ』よっ！」

「いただきますっ！」

完成したのは大きめのまんまるハンバーグだ。芽吹がナイフを入れると、肉汁がソースと混ざり合って滴る。グーで握ったフォークで刺し、芽吹はそれを口に運んだ。

「んむ〜♪」

「ほら、口にソース付いてるわよ」

口の中で肉汁が溢れ、玉ねぎのシャキシャキとした食感と共に肉の味がじんわりと広がる。頬張った時に付いたソースを夏凜が拭うと、芽吹は嬉しそうに笑った。

「その笑顔が見られたなら大成功ね」

夏凜はそう言いながら釣られて笑みをこぼし、少し焦げた自分のハンバーグを食べるのだった。



## 第五話【幼体化の原因と出撃制限（夏凜ちゃんの回想なのでシリアルです。ご安心を☆）】

「夏凜お姉ちゃん、お城出来た！」

「はえ、器用なもんねえ」

ある日の休日、折り紙で遊んでいた芽吹が子供にしては綺麗に折られたお城の折り紙を見せてくる。

「よし、なら私は……はい、お城を守護する勇者よ！」

赤い折り紙で作った人っぽい形のもの。自立するそれを芽吹が折ったお城の隣に置く。

「わああ〜！ 私も折る！」

「ふふん……これは私が編み出したオリジナルなの。だから教えてあげるわ。まず三角

に折って——」

夏凜はそうやって芽吹に折り方を教える。そんな中で、数日前の出来事を思い出していた。勇者と巫女全員が集まり、「大赦の調査報告」を受けていた時のことだ。

\* \* \* \* \*

「——原因がわかった?!」

「はい。想定通り、夜の樹海に実る果実でも、バーテックスによる攻撃でもありませんでした」

ひなたは一部の勇者に囲まれながら話す。

「神樹様が、中立神と共に試練として行つたようです。過去の芽吹さんが召喚され、半自然的に今の芽吹さんと融合したことで記憶の混乱が起きている。……という見解です」

「ゆ、ユウゴウ……また随分と面倒なことになりましたわね……」

「め、メブ戻るの!? ねえメブ戻るよね!」

夏凜もそうだが、防人組が一番慌てていた。共に生活した時間が長いことから、心配の度合いは言うまでもない。

「どうすれば戻るかっちゅー話は今のところさっぱりわからん。神樹様からの神託もなしや。まー自分たちで何とかしてみろってことやろなあ」

「そうなってしまくと、あとは楠様の問題ということになりますね。やはり、何かを成さなければ戻ることはいらないでしょう」

夏凜は静と美佳の話聞いて、一つの疑問を持つ。

——幼体化の影響で記憶を失い、そんな状態で一体何を成せと言うのか。

「……と、とりあえず！ 今の芽吹先輩に御心配をおかけしないようにしないといけませんね！」

今度遊びに行こう。そう思いながら、亜耶は言う。

「そうだね、もしかしたら時間が経てば記憶も戻るのかもしれないし……少し様子見するのでもいいと、私は思うな」

「エクセレント！ さすがみーちゃん！ それなら今のうちに蕎麦の素晴らしさを教え込んでおきましょう！」

「白鳥……それよりやること、あると思う……」

「野菜が先かしら!？」

「あ……うん……ふぁいと」

しずくは瞳を輝かせる歌野を、どこか諦めた表情で応援した。栄養補給は大切だ。子供なら尚更。

「早速新鮮な野菜を持ってくるわ！ 夏凜さん、是非持っていて！」

「あ、普通に助かる。ありがたく頂戴するわね」

——と、歌野が部室を出て行こうとした瞬間。警報が鳴り響く。

「最近頻度が早まっている気がするな」

「あら、もしかしてお疲れかしら」

「いいや問題ない。千景が一緒なら、安心して戦える」

「なっ、よくそんな恥ずかしいこと平然と言えるわね……」

「恥ずかしくなんてない、本心だ」

「こつちが恥ずかしいのよ……!!!」

そんな、若葉と千景のやり取りを微笑ましくひなたは見守る。……が、刹那表情が変わる。巫女全員、険しい表情だ。

「ヒナちゃん、どうかしたの？」

高嶋が心配そうに聞く。そんな高嶋の前で、ひなたは奥歯を噛み締めた。

「——出撃制限です。出撃可能な勇者は……三人」

「なかなか難しいこと要求してくるねえ……上里ちゃん、これ間違いじゃないよね？」

「間違いじゃないことは、ここにいる巫女全員を見ればわかります……」

「だよね……出撃するのは三好ちゃん、三ノ輪ちゃん。……そして、*“楠ちゃん”*」

「は……………?」

夏凜はポカんと、呆けた顔で思わず声を漏らす。真鈴が言ったことは真実で、巫女全員が同じ神託を受け取っていた。

「ま……待つて、芽吹は変身も出来ないんじや……!」

「それなんです、実はこの後話そうと思っていて……芽吹さんの勇者システムの調整が完了したんです。……つい先程」

「あ、あの状態で戦わせるっていうの!」

記憶が無いということは戦闘もままならない。身体に染み付いた動き……というのも、幼体化してしまっているので無理な話だろう。

だが、大人しく黙って話を聞いていた芽吹が口を開いた。

「お姉ちゃんたちと行きます」

「め、芽吹……本気なの?」

「夏凜お姉ちゃん、いっつも大変そうだったから……少しでもお手伝いできるならやり

たい！」

芽吹はそう言うのと端末を手に取る。子供の手には少々大きく、両手で握っていないと落としてしまいそうだ。

「夏凜さん、あたしも頑張ってみます。だから芽吹さんのそばにいてあげてください！」  
「……仕方ないわね。二人とも、一緒に行くわよ！」

「うん……！」  
「はいっ！」

他勇者と巫女が心配する中、夏凜、芽吹、銀は戦地へ赴く。  
そしてそこには……蟹、射手、蠍が待ち構えているのだった——。

## 第六話【星天ノ殃禍：新星逆襲 其ノ二】

——花卉が舞い上がる。色とりどりの根っこやツルが出現し、現実世界とはかけ離れた幻想的な風景へと一変する。そうして、夜の樹海が顕現した。

花が咲く。ツツジ、牡丹が咲き誇り………続いて小さなナズナが咲いた。

「……がお姉ちゃんたちががんばってるところ………すごい……！」

幼くなつた芽吹の体型に調整された防人の戦衣は、指揮官型専用のバイザーは邪魔ではないか”、という意見が多く、の神官から寄せられたことで一時的に取り外された。

それに伴い、銃剣も小型化された。短剣に拳銃がくっ付いたようなもので、さすがに以前のような威力は出せない。そもそも今の芽吹に戦闘能力はないので、全体的な性能低下が見られる。

「だよな、わかる。アタシも最初はそんな反応だった……」



瞳の奥を輝かせる芽吹を見て、自分が初めて樹海に来た時のことを思い出した銀は、フツと笑って少しカッコつけてみる。

「二人とも、気を抜いていると危険よ。まだ敵は見えないけど、どこから来るかわからな  
いわ」

「はい。——でも、確かにいないっすね。バーテックスもかくれんぼとかするの  
かな？」

「私、隠れるの得意だよ！」

「おつ、それじゃあ今度須美たちとやるか！ 銀様の鋭い勘ですーぐ見つけちゃうぞお

く」

「きゃ〜♪」

じゃれあう銀と芽吹を見て、夏凜の変に緊張していた心が落ち着く。いつも通りやれば問題ないはずなのだ。どんな敵が来ようと殲滅する——。

……刹那。銀がハツとして遠くを見つめる。夏凜も異常事態に気付き、同じく目を懲らす。

「くう……狙撃手の東郷がいないからわかりにくいわね。暗いし」

「ですね。でも見たところ三体しかいませんよ?」

「雑魚がいないのは好都合。銀、先制するわよ!」

「あ、はい! ……つて芽吹さんはどうするんですか?」

「あつ」

「……ここで待っていて……。……と言うものならすぐさま蜂の巣にされそうだ。ここま  
で連れてきておいて何も出来なかつたらあとで拗ねる。絶対。それを夏凜は、ここ数日  
共に暮らしてわかつていた。」

「……あんまり近づいちゃだめよ? 少し離れたところから敵を狙って、ここを指で押  
すの。そうすると弾が出てくるから。間違つても覗き込んだりしちやダメよ? いい  
?」

「うん!」

「なんだか……ホントにお姉さんになつたみたいですね夏凜さん」

「お姉さん……それもアリかもしれないわね。——じ、冗談よ! ほら、突撃つ!」

自分が言い放つた言葉を撤回し、夏凜は恥ずかしさを誤魔化すように敵陣へ飛んでいく。

——敵はこちらと同じく、三体のみ。蟹座を冠する、何枚もの硬質な板を扱うキャンサー・バーテックス。射手座を冠する、二種類の矢を使い分けるサジタリウス・バーテックス。そして蠍座を冠する、猛毒を扱うスコープイオン・バーテックスだ。

「まずは——ッ！」

樹海の根を蹴り、夏凜はキャンサー・バーテックスに突撃する。その巨体の周りに浮遊する板は、単体ならば対処は簡単だ。だが、この板はサジタリウス・バーテックスの矢を反射して、急激な方向転換を可能とする。矢が放たれば移動も制限され、その制限された道に逃げ込むと、スコープイオン・バーテックスが毒針で狙ってくる。

一体一体がそこまで脅威でなくても、束になればそう簡単には折れない。だから、その束をへし折るために——。

「すぐに終わらせるわッ！」

その瞬間、チリチリと空気が揺れた。地から光が伸び、キャンサー・バーテックスに接近する夏凜を覆い尽くす。——そして大輪が開く。

「《満開》 ツツ!!」

夏凜の意思で、満開システムが起動した。二対四本の赤手が現れて交差し、刀を握る。そして、目前に迫ったキャンサー・バーテックスを勢いを維持したまま押し斬る。

……………はずだった。

「…………ツツ!? 何、これ…………ツ、満開でも攻撃が通らない!!」

キャンサー・バーテックスが反射板を組み、盾にして夏凜の一撃を防いでみせたのだ。満開でパワーアップした一撃を、意図も容易く。

過去にそれで防御されたことを夏凜は覚えていた。だから今の全力をぶつけて、反射板で防がれても砕く自信があった。この世界に来て、それが出来るだけの力は身に付い

ていたはずなのだ。

「……あつ、しま——ッ!？」

「夏凜さあああんツ!!!」

予想外のことで他に注意が向かなかつた夏凜を狙い、サジタリウス・バーテックスが矢を放つ。が、そこへ銀が斧から炎を噴射して夏凜の助けに入る。

「悪い、助かつた……!」

「いえ……! アタシも今のが防がれるとは思ってなかつたので……とにかく間に合つてよかつたです!」

夏凜は体勢を立て直しながら思う。先程の矢もそうだ。明らかに前より射速が速くなっている。……つまり、考えられるのはただひとつ。

(強化個体……ってわけね)

自分たちを見下ろす三つの星を見上げた夏凜は、強敵を前に冷や汗を垂らし、刀を強く握り締めた。

## 第七話【星天ノ殃禍：新星逆襲 其ノ二・決】

満開した夏凜の一撃を、それも以前防がれた経験を活かして放った一撃を意図も容易く受け止めたキャンサー・バーテックスを、夏凜は見上げる。

刹那、矢が放たれた。

「つ、させるかアアアアアッ！」

サジタリウス・バーテックスの無数の矢が、キャンサー・バーテックスの板に反射して方向を自由自在に変えてくる。狙われたのは——芽吹だ。

夏凜はすぐ飛翔し、芽吹の前に立つと向かってきた矢を全て弾き切る。射速も上がっている上に、その矢の一撃一撃が重くなっていた。二刀がボロボロになるくらいだ。命中は避けたい。

「くっ、脆い……！」

夏凜は刀を捨て、新たに出現させた刀を握る。——その最中、銀はスコープ・オン・バーテックスに突撃していた。

「おりやりやりやりやりやりやりやりやああああああああああ!!!」

半透明な緑色の尾を斬り刻み、どうにかしてこちらに注意を引く。今ここでスコープ・オン・バーテックスが夏凜に向かっていったら、きつと攻撃を防ぎ切れない。

「お前の相手はアタシだアアア!!!」

斧から炎が爆発する。自身を吹き飛ばし、銀はスコープ・オン・バーテックスの頭部を打ち砕く。さすがにキャンサー・バーテックスよりは脆いようだ。

「……銀ばかりに頼ってる訳にはいかないのよッ!」

銀の行動の一部始終を見て、夏凜は呼吸を整えて叫ぶ。後ろには、今の攻撃で怯えて座り込む芽吹がいる。そんな中、追撃が始まった。



『なにつ……見てんのよッ!』

刀を二本投擲し、反射板を掻い潜ってキャンサーの頭部に突き刺す。浅い……が、今の攻撃で反射板が狂い動き、サジタリウス・バーテックスの矢は反射して上空へ、さらに反射して地へ——。そうして、キャンサー・バーテックスの巨体に無数の矢が突き刺さった。

「いくらステータスを上げたところで！ 元の動きと変わりないなら意味ないのよッ  
！」

「さっすが夏凜さん！ 一生着いていきます♪」

そう、この星々は確かに強くなっているが、その動きは以前と変わっていない。既に見た攻撃……既に見た連携……油断しなければ攻撃を受けることすらないだろう。そして、この勇者たちは敵を目の前にして油断するほど愚かではない。

「お、お姉ちゃんたち……こわく……ないの……？」

後ろで震える芽吹がそう言った。記憶が混乱し、初めて見るバーテックス。幼くなっているのも無理はない。

夏凜たちは怖くないわけではない。必死に戦っているのだから、怖いとずっと思っている。だがその怖れは弱さではない。

「——勇者だから。かしらね」

友奈の姿を思い出し、夏凜は答える。怖いからこそ、その脅威から誰かを守らなくては強く思える。それこそ、勇気を持たなくては出来ないこと。だからこそ《勇者》——。

「アタシたちが頑張れば、みんなが笑顔になるんだ。だから戦えるんだ」

夏凜に続き、銀は答える。その頑張りがつらいものでも、あとの笑顔で疲れは吹き飛ばす。その守った笑顔で、自分も一緒に笑うことができる。

——勇者だから頑張るのではない。それを成そうとするから勇者なのだ。

「あなたも勇者よ、楠芽吹」

夏凜は幼き勇者に手を差し伸べる。

「1+1+1を、3じゃなく、10でもなく……アタシたちで100にしてやろうぜ！」

銀は自分よりも幼くなった勇者に手を差し伸べる。

二人は笑っていた。その笑顔が、芽吹の恐怖を和らげた。二人の手を握り、三人で手を繋ぎ、並んで星と対峙する。

「——さあさあッ！　ここからが大見せ場ッ！　遠からん者は音に聞け、近くは寄って目にも見よッ!!」

「見せてやる。気合と、根性と……！　魂つてやつをッ！」

「……私も戦う。絶対帰って、夏凜お姉ちゃんに褒めてもらおうっ！　私を舐めるな！」

気合いは充分。覚悟完了。元の調子を取り戻した少女たちは、怯んで様子を伺っていた星々に言い放つ。

『――！』

サジタリウス・バーテックスの矢が放たれる。小さく無数の矢ではない。極太の、一本の矢だ。

「銀っ！ 行つて！」

「はいッツ!!」

銀は向かってくる太い矢を走り抜け、サジタリウス・バーテックスに接近する。

「大きくしたからつて、防げないとも思つたかッ！ ハアアアアッ!!!」

タイミングを見計らい、夏凜は矢を打ち砕く。だが、その極太の矢が放たれた瞬間に、サジタリウス・バーテックスは再び口らしき部分を開いて、無数の矢を解き放っていた。

キャンサー・バーテックスの反射板に当たり、夏凜の無防備な背後を狙う。さらに、それを回避されないよう、回避ルートにはスコープオン・バーテックスがスタンバイしていた。毒針が夏凜を狙う。

矢を全て斬ることは容易い。だがそうしている間に、芽吹が毒針の餌食になる。避けてスコープオン・バーテックスに突撃するのが一番だろうが、芽吹を抱きかかえたまま突撃するのは危険すぎる。

（でも、あんたはそんなちっこくなくても——）

楠芽吹という人間であることには変わらない。

「お姉ちゃんたちの邪魔をするなあああッ！」

芽吹はスコープオン・バーテックスの毒針を狙い、引き金を引く。刹那放たれた弾丸が、毒針の頂点と衝突し、火を噴く。毒針は碎け、スコープオン・バーテックスが一時ダウンする。今がチャンスだ。

「芽吹っ！」

「うん……！」

夏凜は芽吹を自身の懐に来るよう合図すると、芽吹と共に無数の矢を弾く。二対四本の赤手が握る刀で斬り、その隙を狙って小さな銃剣が弾丸を放つ。

「夏凜さーん！ 持ってきましたあー！」

雨のように降り注いでいた矢が急に収まったと思ったら、銀が口を砕いたサジタリウス・バーテックスをキャンサー・バーテックスに向けて投げ飛ばした。

『——ッ！』

「邪魔よッ！」「邪魔だッ！」

立ち塞がるスコープオン・バーテックスを、夏凜と銀は容赦なくぶった斬る。三体のバーテックスが山のように積まれた。

「これでトドメだ、化け物ツ！」

銀の斧に空いている穴から赤い光が現れる。それは高速回転を始め、やがて熱い炎を燃え上がらせた。——だが、その炎を纏うのは斧ではなく、刀だ。

「行つてください、夏凜さん!!」

「ええ！ 一気に殲滅してあげるわ！」

銀から炎を受け取り、夏凜は積み重なった三体を断ち斬ろうとする。……が、そこに何枚もの板が交差して夏凜の攻撃をまたもや受け止めようとする。

今度はそうはいかない。夏凜は止まることなく刀を振り上げる。反射板を全て碎けば威力が落ちて、本命の三体を一度に討つことは難しくなるだろう。だから夏凜は、敵の盾を芽吹に任せた。

「くらえ！ 楠流打点破碎撃いっつ！」

芽吹は銃剣を思いっきり突き出し、刃でスコープオン・バーテックスの反射板を突く。





## 第二章 《三好夏凜は姉で章》

### 第八話【雀、絶叫ス——！（そして爆誕☆姉夏凜）】

「うわあああああん!!! 無事で良かったよおおおメブうううううう!!!」

部屋に帰るや否や、雀はいつものように泣き叫びながら芽吹を抱き上げる。芽吹はムスツとした表情で、されるがままだった。

「雀、降ろしなさい」

「あ、うん。……今思ったけど、他のみんなはお姉ちゃんって呼んでるのに私だけ変わらないんだねメブ。いやそれはそれで嬉しいんだけどちよつとだけでいいから私もお姉ちゃんって呼ばれてたいなメブ」

なぜか自分にだけ態度が変化していない芽吹を降ろして、期待の眼差しを向ける。

「加賀城、それよりも……」

「それよりも!? それよりもってなにさしずくううう!!」

「だアアアア!!! だから耳元で叫ぶな! それよりも! なんで三好……さんがこんなことになってんのかだろうがよ!」

「そうだけど! でも私もお姉ちゃんって呼ばれ——ねえ待つてシズク今『三好さん』って言った?」

「うっ、いやだつてよ。さすがに……なあ?」

シズクはそう言いながら、芽吹と銀と一緒に帰つてきた夏凜を眺める。

「な、なによ……みんな揃つて」

そう言つて少し頬を紅くさせるのは、夏凜に非常によく似たお姉さんだった。

「そりやそうなるでしょ。だつて夏凜、帰つてきたらアタシより女子力高くなつてるんだもの。身長も棗といい勝負よ? アレ……もしかしてよく見たら超えてる……?」

風は夏凜を見上げて言う。そう……よく似たお姉さんではなく、夏凜が本当にお姉さ

んになっていたのだ。髪は前よりも長く、ツインテールにほが伸びていた。そして今度は神樹の配慮なのか、変身解除後、制服のサイズがすっかり調整されていた。

「二十代前半……くらいかな。いやあさすが夏凜、美人さん！ どんな服でも似合いそうだにやあ」

「幼芽吹の次は姉夏凜かいな！ なっはははは！」

原因は……芽吹と同じ、試練の一環だろう。ただ芽吹の状態とは異なり、大人になった夏凜には以前の記憶がすっかり残っていた。

「なんかこの視界慣れないけど、迷惑はかけないようにする」

「夏凜ちゃん！ 困ったことがあったらなんでも言っていていいからね！ 勇者部五箇条、悩んだら相談！」

「わかってるわよ」

「だ、だから……ね。ちよつとお願いが……」

「へ……？」

結城が夏凜の隣に擦り寄る。それを見た芽吹はムツと嫉妬したように、可愛らしく眉間に皺を寄せると、夏凜の懐に入って両手を挿んで自分を抱きしめさせる。

「夏凜お姉ちゃん……撫でて?」

「き、急になによ」

「夏凜お姉ちゃん早く撫でてえ♪」

「園子ズはちよつとメモ帳閉じてなさい!」

その様子に、風はカツと目を見開いた。

「女子力がオーバードライブしているツ!? 圧倒的な姉感に、あの友奈と芽吹が甘えんぼうモードにツ!!」

「き……急にどうしたのお姉ちゃん」

「ああ……私がマイシスター樹……私を姉と呼んでくれるのは樹だけよ……。くつ、まさか夏凜にこの姉ポジションを取られるなんて……!」

「もう……私のお姉ちゃんはお姉ちゃんだから、安心して」

「い……い”””き”””い”””い”””い”””くく!!」

「お、お姉ちゃんっ！ 恥ずかしいから離れて……！」

「離すものかああああ!!! 一生離さないからああああ!!!」

自分の妹に抱き着き、泣き叫ぶ風の声が部屋に響く。夏凜はせがまれて仕方なく結城と芽吹を撫でる。その様子に、微笑ましい笑顔を浮かべる園子ズは、表情とは打って変わって異様なスピードでメモを取っていた。

（……さて）

園子（中）はメモを取りながら思考を変える。

この微笑ましい日常のメモはまだ純粋な過去の自分に任せて、園子（中）のメモには現状を事細かくまとめられていた。

（なんでも「神様だから」……で話は通るけど。にぼっしーの身体は短時間で急成長している。そのこと自体は可能でも、急成長の副作用があるはず……メブーの時と同じように——）

楠芽吹——幼女化、推定年齢・四〜六歳。症状……記憶喪失。

三好夏凜——大人化、推定年齢・二十〜二十五歳。症状……無し。

芽吹の幼女化の影響は記憶喪失。そこに、園子は不安を抱かざるを得なかった。

（今はまだ、幼女化のおかげでこの状況を楽しめている。でも、時が経つに連れて防人のみんなはきつとつらくなる……）

夏凜も同じように突然記憶を失うかもしれない。そう思いながら、園子は東郷の顔を見つめる。結城が夏凜に撫でられているのを見て、ガルルと唸る東郷がいた。

（私と同じ思いは……させたくないなあ……）

メモ帳を閉じ、園子は結城とは反対側に座って夏凜に撫でもらうために、身体を預けるように肩に頭を置く。

「そのつちまで!!? おのれ三好夏凜………」

「と、東郷先輩落ち着いてください！」

「そうよ東郷、落ち着きなさい」

「お姉ちゃん……抱き着きながら言っても説得力ないよ……」

キリツと真剣な顔で言う風に、樹はため息ツツコミを入れながら東郷の腕をガツシリホールドして捕らえる。

「——クワツツ！ そのつち、メモ！」

『『尊い♪』』と思つた時、ステにメモは終わつてるんよツ！ ……あ、園子先輩のもメモしときますね〜」

「わ〜い♪ 一緒にメモされようね〜にほっしー♪」

「はいはい。つて言うと思つたか！ そのメモ帳超越しなさい！ ……くつ、芽吹たちが居るから動けないっ！」

両手は膝の上に座る芽吹、左右の結城と園子（中）の三人を撫で、身動きひとつ取れない夏凜はメモされるがままだった。

「ふっふっふ……大人しくメモされてください、夏凜先輩♪ これはすごい良いものが書けそうなんよ〜！ ねーサンチョ♪」

『スイ、ムーチョ』

「ぐぬぬ……あーもう！ こうなりやヤケよ！ 完成型勇者・三好夏凜！ いざ参るッ  
！」

その後、夏凜の撫でテクも急成長したのか、友奈神拳にも劣らない手つきによる甘い撫でで、芽吹や結城、園子（中）はしばらく虜になったという――。



## 第九話【脳内に響く警報音】

「——折るだけ折って寝ちゃったか……可愛い寝顔ね。全く……お腹出して寝てる  
と風邪引くわよ〜」

夏凜作の完成型勇者折り紙。その折り方を教わった芽吹は、もう何度折ったのかわからないくらい折りまくり、床にゴロンとだらしなく寝っ転がって眠ってしまった。

強化バーテックス戦……夏凜が大人化してから、早数日。元々環境適応能力が高かったのか、芽吹との生活にも、自分の急成長した身体にも既に慣れていた。……が、夏凜は自分の胸を不満そうに見つめる。

「成長……したのよね？ 本当にこれが未来の私の姿だとしたら………くっ、希望は無いのかっ！ ——はッ！ まさかこれが副作用!!!」

夏凜もまた、園子が密かに思っていた副作用について気付き始めていた。未だ、副作  
用らしきものを認識は出来ていない。あるかもしれないし、もしかしたら急成長という

現象自体が副作用なのかもしれない。

「んなわけないでしょ、あと芽吹が起きちゃうから静かにね」

「ふ、風!? ……ど、どうしてここに」

突然部屋に入ってきた風にビックリしながらも、夏凜は音量を落とす。

「どうしてって……今日お昼ごはん、アタシが作ったげるって昨日言ったでしょ?」

「あ……そうだった。完全に忘れてたわ」

「ちよおっ! ……ちよおおい……! アンタが料理しづらいつて言うから……! つてすごい怒りづらい……!」

芽吹を起こすわけにもいかなないので、風は音量を極力落として見た目は完全に歳上のお姉さんな夏凜を怒ろうとする。

「ご、ごめん。忘れてて説得力ないかもしれないけど……ホント助かるから、お願い、風」

夏凜はそう言って、無意識のうちに風の頭を撫でていた。

「あ、え……は、はい！　って違う！　夏凜も撫でない！」

「い、いつの間に自分の手が……」

「もう……芽吹見てて。パパッと作っちゃうからさ。うどんでいいわよね？」

「任せるわ。……あ、鍋はそっちの棚ね」

「はいはい。じゃあちよつと待ってるのよ」

夏凜の撫で手を払い除けた風は、気を取り直して自前のエプロンを着て料理を始める。

「……ほんとお母さんみたいね」

「誰がっ！　……誰がお母さんよ……！」

お母さんのような中学生と、正真正銘お姉さんな中学生、そして中身は一応中学生の幼女が集う謎の空間で、しばらくすると美味しくそうな匂いが鼻をくすぐる。

「んうう……？　かいんおねいちゃん……？」

「まだ寝ぼけてるわねこれ……風が来てくれたわよ。そろそろうどん出来るから起きな  
ゃ〜」

「ん〜……………」

「ああ……………しばらく起きそうにないか」

一度はまぶたを開いた芽吹だったが、眠気に抗えなかったのか重そうにまぶたを閉じ  
て、夏凜の膝の上で寝息を立てる。

「むにゃ……………すずめ……………いい加減にしなさい……………」

「ぶふっ。夢の中でも怒られてるのね」

芽吹の寝言を聞いて、夏凜は思わず幼い芽吹に叱られる雀を想像して吹き出す。

——しかし、次の瞬間……………。

「……………夏凜……………次こそ……………必ず……………勝つてみせるから……………むにゃ」

「……………え」

その寝言は明らかに、今の……幼芽吹の記憶にはないものだ。訓練生時代、勇者の座をかけて互いを高め合っていた頃の記憶だ。

「め……芽吹っ！ 思い出したの!?!」

夏凜は芽吹を起こそうと、身体を激しく揺さぶる。

「ふえ……? おあよう、かりんおねえちゃん……」

だが、目を覚ました芽吹には、表情や言動に幼さが残る。思い出したという訳ではないらしい。

「……あ、おはよう……ご、ごめん。起こしちゃって……もうすぐどん出来るから、手……洗ってきちゃって」

「え！ うどん!?! わーい！ ……あ、風お姉ちゃんこんにちわ!」

「おお、起きたの芽吹。今アタシ特製の女子力うどんが出来たからね」

井に溢れんばかりのポリウムを誇る女子力うどんを前に、芽吹の瞳がキラキラと輝く。夏凜はそんな芽吹が意気揚々と洗面所に向かっているのを見つめると、一息つく。思い出していないのは残念だが、ひとつだけ、確実なことがハッキリとした。

(芽吹は記憶を失ったわけじゃない。忘れてるだけ……記憶に鍵がかけられてる)

そもそも、この異常事態が「試練」なのだから――

(……まあ東郷の時みたいな感じか)

その時、夏凜は自身の思考に違和感を覚えた。

「東郷の時……って、なに……これ……知らないっ。どうして知らないはずの記憶があるの……!?!」

刹那、夏凜の脳内に膨大な情報が駆け巡る。今の夏凜が知らないはずの記憶……。崇り……神婚……そして見たこともない服に身を包み、天へ翔ぶ結城友奈の

姿。

「未来の……記憶……？」

頭の中で、アラームが壊れる音が何度も何度も繰り返される。胸が苦しい。右頬が痛む。恐る恐る頬に手を触れると、大きな傷が出来ていた。

「私………は………」

痛む頬に触れた手に紅い血が付いているのを見ると、急に視界が明暗し、夏凜はフツと……暗闇の中へ落ちていった。

# 本編とは全く関係ない閑話（筆者の暴走とも言う）

これは、とある園子の物語である——。

く前回なんてないけど前回のあらすじく

物理的に大人っぽくなった夏凜。そして物理的に幼くなった芽吹。そんな二人のチヨメチヨメを書くため、小さい方の乃木園子はありとあらゆる手段を用いて二人の行動を観察していたが、そこへ神樹様が『ナンカスゲーカミサマパウワア』を発動！ さらに同時刻、二十一体の精霊のお世話をしていた大きい方の乃木園子が手違いで精霊の力を発動！ さらにさらに同時刻！ 『ナンカスゲーカミサマパウワア』を感じ取った巫女たちが操られたように謎の儀式を始め——様々な事象が重なり合い、何故か夏凜と芽吹がお互いの顔を近付けて……!!?!

……某イネス、某試着室。密室で姉夏凜と幼芽吹が見つめ合う……。

「——や、やややあ〜!? こ、こっつ、これは……! 噂によく聞く『顎クイ』! 夏凜先輩大胆〜♪」



乃木家開発・4K対応超小型カメラ搭載マイクロドローンで夏凜と芽吹のチョメチョメを覗く園子は、早速メモに書き記す……………。

人目を遮るカーテンのおかげで、二人だけの世界が広がる。小さな芽吹の身体を抱き上げ、顎を無理のない程度にクイツと上げる夏凜——。熱い吐息が混じり合い、心臓の鼓動が早まる。

「ねえ…………芽吹…………。私もう我慢できない…………」

「夏凜お姉ちゃん、どうしたの…………？　なんか熱い…………よう？」

高揚する夏凜に、困惑する芽吹は本能的にこれから何をされるのか理解する。夏凜は瞳を閉じた芽吹を見つめながら、ゆっくりと…………まるでスイーツを食べるように口を近づける。

「はむっ…………ん…………ちゅ…………」

とうとう理性が失われ、芽吹の甘い唇に触れる。小さな口を頬張るかのように口付けし、舌まで絡める。芽吹も、そんな夏凜に答えようと必死にキスを返す。

言葉はいらなかった。その行為が、お互いの愛情を確かめ合う。深く濃厚なキス。蜂蜜に溺れるような快感に、二人は一緒に落ちていく。

「ぶあつ……おねえちゃ……んむっ」

「ちゅ……芽吹、大丈夫だから……私に任せて……ちゅっ、ちゅるっ……」

夏凜はキスを続けながら、抱き上げた芽吹の服の中に手を入れる。脆いガラス細工を撫でるように、壊さぬよう恐る恐る手を伸ばす……。

「——楽しそうね、園子」

「えへへ、妄想は止められないんよ！ ……つてあれれ？ 夏凜先輩？ 試着室にいたはずじゃ……？」

「いたわよ。いたけど……急に飛ばされたのよ、なんか光って」

説明しよう！ 大きい方の園子の精霊の力が発動したことで芽吹が風邪を引き、夏凜

が喉の腫れを見るために抱き上げて顎を上げたところで『ナンカスゲーカミサマパウア』が発動！ 一瞬理性が強制的に無くなりそうになった夏凜だったが、巫女の儀式で芽吹共に光に包まれる！ 光が消えた先は、妄想しながらメモをとる小さい方の園子の前で、全てを理解した夏凜は『ナンカスゲーカミサマパウア』を打ち消し今に至ったのであるッ！

「園子」

「は、はひっ！」

「ちよっとお姉さんと裏に行こっか」

そう言った夏凜は笑顔だった。でも目は笑っていないかった。

「ひ、ひええええ！ 吊るすのはお許しを〜！」

——こうして、園子の妄想は幕を閉じる。その後の園子がどうなったのかは……  
夏凜のみぞ知る。

再び幕が上がるその時まで、我々はただひたすらに待とう。

チヨメチヨメの章  
く完く

## 第十話【月に叢雲、花に風】

三好夏凜が意識不明となつてからしばらくが経つた。

大赦の調べによると、やはり原因は身体成長の副作用だ。

「夏凜ちゃん……。風先輩、夏凜ちゃん大丈夫ですよね……。？」

「友奈……。ええ、大丈夫よ！ きつと煮干しとサプリが恋しくなつて戻ってくるわ！」

白い壁、白いベッド……。色のないそこに、夏凜が眠っている。

今日、夏凜のお見舞いに来たのは初代勇者部……。風、友奈、東郷と、芽吹だ。

部活動は樹と園子を中心に任せて、この四人で夏凜が眠る病室に立つ。

……。というのも、呼び出しがあつたからだ。

夏凜の副作用のことで話があるとのことだが、現在あまり良い状態とは言えないので四人は不安だった。

「……。ん、東郷。平気？」

「だ、大丈夫です。ご心配をおかけしました。……ただ少し、この空間には慣れないもので」

「東郷さん！ 私がついてるからね！」

「うん、ありがとう友奈ちゃん」

東郷が震えながらそう言うと、不安から震えていた手を友奈がギュツと握る。

少し落ち着いていたようで、東郷は笑みを浮かべる。

——直後、白い扉が開かれ、仮面を着けた男性神官が一人、病室に入ってくる。

「勇者様。大変お待たせしました。早速ですが、わかったことをお話させていただきます。夏凜……コホン、失礼。三好夏凜様の副作用についてですが、『記憶の付与』……ではないかと推測されています」

「推測……ですか？ 確証は無いと？」

「左様です、東郷美森様。これも試験の一環……我々では答えには辿り着けないのです。ただ、推測と申しましたが、私個人にはその推測を裏付ける証拠があるのではと……」

神官は今も目を開かない夏凜の横に立つと、優しい手つきで髪に触れ、大事そうに撫

でる。

勇者だから……必要な戦力だから……というような雰囲気ではなく、芽吹たちは何かもつと深いものを感じる。

「……証拠は、この睡眠です」

「あつ、記憶の整理をしている……つてことですか?! 確かに……芽吹の時にはそれは無かった……。記憶を無くしただけだから、整理するものが無いんだわ」

「はい。なので……植え付けられた記憶の譲渡が完了すれば夏凜は目を覚まします。恐らくは、身体の成長からして勇者様たちがこの世界に召喚される直前から、五年間以上の記憶を……。目を覚ました夏凜が一体どういう人間なのかは、こればかりは目覚めを待たなければわかりません」

「そう……ですか……」

根本的な解決にはやはり到らず、風は肩を落とす。

そんな風を見た神官は、仮面で顔は見えないながらも暖かい雰囲気……微笑んでい  
るかのように見えた。

「今、この言葉を伝えるのは間違っているかもしれませんが……あなたたちにお礼を、ありがとうございます。夏凜のためにここまで……良い友人を持ったようで安心しました」

「……！ あ、あなたはもしかして……」

「……どうか夏凜のことをお願いします。私……いえ、僕は僕で模索し続けます。それが無意味に終わってしまうとしても、あなたたちの力になるために……考え続けます」

\* \* \*

男性神官……いや、三好春信が退室して数十分。

風がリングゴの皮を向きながら、三人に言う。

「多分、もう少ししたら夏凜は目を覚ますわ。でもあの神官さんが言っていた推測が正しかった場合、夏凜はきつと混乱状態よ。記憶の詳細は気になるけど、夏凜が落ち着くまで待ちましょう」

「ええ、寄つて集つて詰めるなんて、尋問みたいなことはしません」

「体の方は問題ないって話だし、夏凜ちゃんが元気になったらみんなにも説明しなきゃ



ね！」

東郷と友奈はそう言うが、不安は拭えない。

もしかしたら……なんて可能性を常に考えてしまう。

「……夏凜お姉ちゃん、苦しそう」

すると、夏凜の顔をずっと覗き込んでいた芽吹が言った。

友奈たちはすぐに駆け寄ると、まるで悪夢にうなされているかのようにもがき苦しんでいた。

顔色が悪いし、汗も凄い。

「夏凜ちゃん！ 大丈夫、私たちがついてるから……！」

「夏凜お姉ちゃん……きつと、すぐ良くなるよ」

友奈と芽吹はうなされる夏凜の右手を握る。

「夏凜、傍に居ることしか出来なくてごめん……」

風もそう言うと、夏凜の左手を握る。

そうしていると夏凜の表情は徐々に柔らかくなり、呼吸も落ち着いてくる。

しかし、安心したのも束の間だ。

病室に樹海化警報が鳴り響く。

「敵バーテックス襲来！……な、これは……出撃制限っ!？」

「あーもう！ そんなにアタシたちに縛りプレイをさせたいのかしら!? 東郷、友奈！

初代勇者部の力、見せつけるわよ！」

「はいッ！」

「芽吹、アタシたちで行ってくるから夏凜のことお願いね」

「任せて……!？」

「いい子ね。——さあ、行っつくわよー!!」

風の合図と共に、友奈と東郷はスマホをタップして勇者システムを起動する。

桜、アサガオ、オキザリスの花弁が舞い乱れ、やがて友奈たちを勇者服へ着せ替える。

だ。  
敵は二体……乙女座、  
ヴァルゴ・バーテックスと、  
天秤座、  
ライブラ・バーテックス

## 第十一話【罪の重さを背負う乙女】

根つこの影からヴァルゴ・バーテックスの姿がチラリと見える。

そしてその隣にはライブラ・バーテックスが鎮座。

両者が動く気配はない。

「あの刺さってるやつはわかるけど、アイツってあの鈍足よね？　なんで動かな……っ

て言った瞬間に来た!?　東郷、お願いっ！」

「了解しました！」

風の言葉はすぐにフラグ回収され、ヴァルゴ・バーテックスの下腹部……尾にも見える器官から爆撃弾が射出される。

それは緩やかな曲線を描きながらこちららに向かってくるが……東郷は冷静に狙撃銃を持つとうつ伏せになり、スコープを覗く。

「結城友奈、行きます！」

東郷が爆撃弾を撃ち抜き、出来た隙に友奈が突撃する。

高くジャンプし、浮遊するヴァルゴ・バーテックスに接近すると、次弾が装填されているのか尾の先が赤く光り出す。

「勇者カウンター!!」

だが、爆撃弾が発射されることはなく、発射の直前に友奈は尾を蹴り飛ばし、弾を詰まらせた。

想定外のこと、爆撃弾が体内で爆発したヴァルゴ・バーテックスは墜落——その下には大剣を担いだ風がニヤリと笑みを浮かべて待ち構えていた。

「東郷、友奈、ナイス！」

そう言った風は、大剣をまるで野球バットののように持ち、落下してくるヴァルゴ・バーテックスを睨みながら思いつき振りかぶる。

その瞬間、大剣が花卉と共に輝いたかと思えば、一回り巨大化し、ヴァルゴ・バーテッ

クスを打ち上げる。

だが、それで終わりではない。

風の大剣がヴァルゴ・バーテックスと接触する時、既に友奈は再び飛んでいた。

「——ていやああああ!!」

友奈は両手を握り合わせると、風によって打ち上げられた巨体を叩き潰す。

そうして、ヴァルゴ・バーテックスはクレーターでも出来る勢いで地面と激突し、ようやく地にひれ伏した。

「友奈ちゃん、風先輩！ 敵バーテックス、回転を始めました！」

根の上でライブラ・バーテックスを監視していた東郷が、根の下にいる友奈と風にそう伝える。

分銅を抱え、今更回転を始めたライブラ・バーテックスは徐々に遠心力で回転速度が上がっていく。

「オツケー！ 東郷は友奈を補助！ 友奈、こっち来て！」

「はい！ —— つとと、でもどうするんですか？ 風先輩」

「んっふっふっ……まあアタシに任せて剣の上に乗ってなさい。友奈は東郷を信じて突っ込むだけよ」

「……へっ？」

わけもわからず風の大剣の上に乗った友奈は、風が力を込めたことで何をやろうとしているのか察する。

「アレは上が脆い……！」

一方で、東郷はファンネルの如く複数の銃を飛ばすと、ライブラ・バーテックスの頭を撃ち抜く。

そして、一気に減速を始めたライブラ・バーテックスの分銅を狙撃銃で狙い、見事に破壊———した直後、風の大剣により高く吹っ飛ばされた友奈が、勢いの無くなったライブラ・バーテックスへ突撃する。

「勇者あくく……。パアアアアアンチツツ!!」

棒のように細い身体へ渾身の一撃を与え、ライブラ・バーテックスをへし折る。

ああ、余裕の連携だった。

東郷のサポートのおかげで友奈も風も無傷だ。

「敵、沈黙……依然警戒」

しかしまだ終わりではないと、東郷の勘が言っていた。

何か……とても嫌な予感が東郷をそうさせた。

「二人とも、トドメは待ってください！ そのまま離れて、私がここから仕留めます！」

「わかったわ！ よろしく東郷！」

「お願いね、東郷さん！」

友奈と風が二体のバーテックスから離れるのを確認して、東郷はとりあえずひと安心する。



——が、その少しの安心が“予感”を的中させた。

ライブラ・バーテックスは残った分銅を唐突に下へ落とし、そのまま自らを地に落とす。

そして、落ちた先には友奈に叩き潰されたヴァルゴ・バーテックスが待ち構えており、落下してきたライブラ・バーテックスを布のような触手で受け止めるとグルグルと巻き付け、自らの身体へ引き寄せる。

見覚えのあるような光景だった。

いや、数も敵の種類も状況も違いはあれど、こうして複数のバーテックス同士が唐突に集まっている。

……やろうとしていることは“同じ”なのだ。

「ま……さか……」

「う、嘘おお!? この二体も合体出来るの!?!」

「うわあ……これは厄介なことになったわね……」

言うなれば、二体のバーテックスの融合……小星団か。

二体ではあるが、星団……スタークラスターであることには変わらない。

布のような触手の先には分銅が融合し、アドバルーンのような上半身の後部には、天秤の支柱、うでと思わしきものが装着されていた。

そして――。

「……ッ！ 仮称、《ヴァルゴ・スタークラスター》の形態が変化!?!」

「うひゃああく！ なんか捻ってるよお!」

分銅付きの二つの触手を捻り合わせ、やがて解き放つと友奈たちへ向けて竜巻が襲いかかる。

「ちよおっ?! その回転を狙い撃ちしてくんのは卑怯でしょうがー!」

そんな風の愚痴も、竜巻の中へ消えていった――。

## 第十二話【狂花】

「……うつ……いったたあ。ハッ——！ 東郷さんと風先輩はっ!？」

ヴァルゴ、ライブラにより形成されたスタークラスターの攻撃で、随分遠くまで吹き飛ばされてしまった友奈は何分気を失っていたのか、目を覚まして、辺りをキョロキョロと見回す。

——遠くで覚えのある銃声が聴こえているので、ひとまず生存は確認出来た。

「まさか合体するなんて……私もこんなところで寝てる場合じゃない。早く二人のところへ行かないと！」

友奈はそう言うとは高く飛翔し、遠くに見えるヴァルゴ・スタークラスターの元へ急いだ。

\* \* \* \*

一方その頃、病室では芽吹が友奈たちの帰りを待ちながら、夏凜の手を握り続けていた。

小さな手を両方使っても余る大きい手を、ギユツと握る。

「……ダメ……よ……友奈っ、みんな……私の前、から……居なく……ならな、いで……」

そんな寝言を夏凜が呟いた瞬間、まるで夢？から逃げるように夏凜は目を醒ました。冷や汗が凄いいことになっているがそんなことを気にする余裕はないようで、手を握っている芽吹をじっと見つめる。

「め、ぶき……？ あ……友奈は!? 風と、東郷と……樹と園子は!? ……あ、いや……みんなは……あれ? でも、だって……私さつきまで……」

「か、夏凜お姉ちゃん……?」

「……ご、ごめん芽吹。なんか記憶がこんがらがっ……て——」

そこで夏凜の思考は停止する。

いや……記憶の整理が完了したと言えいいのか。

夏凜は虚無を見つめ、ハッと我を取り戻すとその手にはスマホ……勇者システムが握られていた。

樹海化警報の文字が点滅し、戦闘中であることがわかる。

「……あつ、そうか。倒れて……それで……」

夏凜は倒れる直前に感じた頬の傷を思い出し、右頬を指で撫でる。

しかし、そこに傷はない。

傷跡だつて存在しなかった。

幻覚症状……いや、記憶の反映による未来体験だつたのだ。

「……じゃあ、この記憶はこの後起こる……。ツ……。こうしちやいられない……。芽吹、私も行つてくる！」

「え……。!? でもお姉ちゃんたちがしゅつけきせいげん？ って言つて……」

芽吹の言葉は届かず、夏凜はすぐさま変身して病室の窓から飛び出して行つてしまつた。

\* \* \*

——ヴァルゴ・スタークラスターの爆撃弾が放たれる。

(何か……。何かおかしい……)

そんなことを考え、意識が逸れてしまった東郷に爆撃弾が向かうが、風がギリギリ大剣で防いで事なきを得る。

「ちよつと東郷、どうしちやつたの?!」

「す、すみません風先輩……。少し考え事をしてしまつて……」

「……確かに、考えることはあるわ。でも今は集中して。友奈ももうすぐこっちに合流するから、それまで持ちこたえるわよ」

「は、はい」

風の言う通り、今は集中すべきだと自分に言い聞かせ、東郷はスコープを覗く。

分銅付き触手を振り回し、前方に竜巻を発生させたヴァルゴ・スタークラスターは、さらに下腹部から爆撃弾を発射する。

「動きが読めない……!」

「くっ、東郷、回避!」

竜巻に吞まれた爆撃弾は、その渦の中を暴れ回り、東郷が撃つ暇もなく着弾する。

爆風に巻き込まれた東郷は後方へ吹き飛ぶと、後ろから合流しに来た友奈にキヤッチされた。

「うわつと! 東郷さん平気!?!」

「ありがとう友奈ちゃん……ごめんさい、どうしても気になることがあつて」

「気になること……?」

「ええ。……敵の難易度、これまでとは全く違うわ。それだけならいいのだけれど……あの姿……見たこともない形態よ」

東郷がそう話していると、風も二人の元に合流する。

「これまで、勇者も増えて苦戦することがなかったから……だからって緊張感がなくなつたわけじゃないけど。今の、この緊張感は……なんだかこの世界に来る前を思い出すわ……」

「……考えられることは二つです。私たちが知らない間に以前の勇者システムへ……つまり弱体化している。そしてもう一つは……」

そんな東郷の言葉を遮り、ヴァルゴ・スタークラスターは触手をムチのように叩きつける。

咄嗟にジャンプして避けるが、もう片方の触手が横に薙ぎ払われ、友奈たちは重い一撃を喰らう。

「ぐっ!! やっぱりいつもより強いよ……!!」

友奈がそう言うと同時に、地面に叩きつけられる。

よろよろと三人は立ち上がり、ヴァルゴ・スタークラスターを見上げる。

触手が再び捻り始め、瞬間に二つの竜巻が発生すると、またも爆撃弾が何発も放たれ、竜巻に吞まれる。

数秒後、打ち上げられた爆撃弾はランダムに周囲に散らばり、無差別爆撃が開始された。

「まずい……!! こうなつたら満開で一気に行くわよ!」

「はいっ！」

風の判断で、三人は一斉に満開を発動しようとする。

……が、しかし——それはヴァルゴ・スタークラスターの頭部に紅い太刀が突き刺さることで中断される。

友奈たち三人が呆然と攻撃される敵を眺めていると、一人の声が樹海に響く。

「——『満開』ッ!!」

「夏凜!」「夏凜ちゃん!」「

そこに現れたのは夏凜だった。

大人の姿で勇者に変身しており、満開を発動するとそのままヴァルゴ・スタークラスターへ突っ込む。

投擲した刀を回収すると同時に、複腕で巨体を掴むと放り投げ、さらにその手に出現させた大太刀を四本、投擲する。

「せやアアアアアア!!」

大太刀が地面ごと体に突き刺さって身動きが取れない敵に対し、夏凜はその巨体を踏みつけるように着地すると、何度も何度も縦横無尽に斬り付ける。

その様は『乱舞』と呼ぶにふさわしく、誰一人として介入を許さなかった——。

「はア……はア……。殲滅、完了……」



ヴァルゴ・スタークラスターが消滅し、夏凜は満開を解いて荒い呼吸を整える。

見事に敵を打ち倒した夏凜だったが、その状況は異常と言う他ない。

「どうして……出撃制限があったはずなのに……」

「風先輩、そのことは一度帰ってからにしましょう。もしかすると……私達が思っている以上に、厄介なことになっているのかもしれない」

「厄介……。で、でもでもっ！ 夏凜ちゃんが来てくれて助かったよ？ きつと出撃制限のところ書き忘れてて、夏凜ちゃんも最初から来れたんだよ！」

「そうだといいのだけれど……」

友奈が心配させないようにそう言うが、東郷の不安は積もるばかりだ。

神樹がいつか来る天の神との戦いのため、勇者たちの実力向上……レベルアップのために、試練に挑ませるシユミレーション……神樹の中にある異世界。

造反神の試練をクリアし、続いて中立神の試練となっていた。

これは全て試練なのだから当然ルールに従い攻略するものだ。

そうでなければ、成長など到底出来るはずがない。

だから、そもそもこの異世界で出撃制限……ルールの無視など、許されないはずなのだ――。

## 第十三話【うわあああやったあいつものメブだ!】

——何もかも懐かしい。

目覚め、そして変身してヴァルゴ・スタークラスターを撃破した三好夏凜はそう感じていた。

本来であれば懐かしきなどあるはずなかった。たった数時間の眠りから覚めただけなのだから、それが当然だ。だから夏凜は自分がおかしくなったのだと理解している。植え付けられた五年以上の記憶……あれから日を跨ぎ、東郷美森と二人だけでそのことを話していた。

これは、夏凜の話を聞きながら東郷がまとめた未検閲の文章である。

勇者御記・壺——。

勇者・三好夏凜から得た情報の要点のみをまとめる。

五年の記憶では、夏凜ちゃん以外の勇者部のみんなは全員『死亡』している。原因は天の神の祟りである。

でも、記憶はその一つだけではなかった。他にも、私と友奈ちゃんがレオ・スターク

ラスターとの戦闘で命を落としてしまう未来や、風先輩が交通事故で亡くなってしまふ未来、天の神と交戦して敗北する未来……様々な未来の記憶が夏凜ちゃんに植え付けられていた。

残酷な未来ばかりで、夏凜ちゃんから聞いていた私の顔はきつと酷いことになっていったらう。

……思うに、これらの未来の記憶はこれから起こりうる話なのだ。

勇者御記・弐――。

防人・楠芽吹の記憶が正常化した。

私達が帰還した後、幼くなっていた楠さんの記憶が元に戻っていた。幼女化時の記憶も残っているらしく、夏凜ちゃんと顔を合わせては頬を赤らめてそっぽを向いている。それでも、未だに体は幼いままだ。

記憶が戻ってきたのは、恐らく例の強化個体……ヴァルゴ・スタークラスターの撃破によるものだろうと私は踏んでいる。この仮定が正しければ、残る黄道十二星座をモチーフとしたバーテックスを全て撃破すれば、夏凜ちゃんの記憶も元通りになって、二人の体も戻るはずだ。

……でも、そう上手くいくだろうか。胸騒ぎがする。

\* \* \*

「芽吹い？ ほらほらどうなのよ、あの時作ったハンバーグの味は！」

「夏凜、とりあえず持ち上げながら聞くのやめなさい！ 子供扱いしないで！」

「いや子供じゃないのよ」

「もう記憶は戻った！ 体は……そうだけど、とにかく早く下ろさないと風穴空けるわよー！」

背が高くなった夏凜と背が低くなった芽吹……その身長差はもはや親子と言われでも不自然ではないほどで、夏凜に軽々しく持ち上げられた芽吹は羞恥なのか怒りなのかわからない赤面を披露していた。

「メブと夏凜さん、なんだか前より距離が近くなった気がするね？」

「雀、今からグラウンド三十周でもしてきなさい」

「うわあああやったあいつものメブだ!? うれしい！ でもグラウンド三十周はごめんなさい!!」

「雀さんあなた……噛みつかれるとわかっていましょう。あなたともあろう者が自ら

肉食動物の縄張りに足を踏み入れるなんて……」

「いやいや弥勒さん。こんなの見せられたら言いたくもなるよお……」

夕海子は雀の視線の先を追う。芽吹がというより、夏凜の方がボディータッチが激しくなっている気がする。

「ああ、完全にベタ惚れですわね」

「ほ、惚れてないわっ!」

「これは失礼。ですが楠さんを見る目といい、その高頻度のボディータッチといい……『ロリコン』などと呼ばれてもおおかしくない光景をわたくし達は見ているのですが……」  
「ええっ!? そ、そんなに? おかしいわね……これでも自重していると思ってたんだけど……凄く懐かしいし、なんかこう、守ってあげたくなるというか、そんな感じがするのよ」

ある種の母性なのか、それとも植え付けられた未来の記憶が作用しているのか、夏凜は前よりも人と触れ合いたいという気持ちが強くなっていた。

「今の私では力不足とでも言いたいのかしら? 鍛錬を重ねれば、この子供の体でも二刀流くらいいけないわ」

「もう少し自分の体を労りなさいよ……。ほら、前みたいに言ってみなさいよ、『夏凜お姉ちゃん』って。そしたら私の完成型膝枕でお昼寝させてあげてもいいわ!」

「はあ……………こほん。夏凜お姉ちゃん、だいすき♪」

「あ、ホントにやるのね」

「……………」

攻めに出れば夏凜を痛い目にあわせられるだろうと思っていた芽吹だったが、見事に自滅した。

赤くなつた顔を隠すように両手で覆い、座り込んで小さい体をさらに縮こませる。

半ば強引に膝枕させられた芽吹は、尚も両手で顔を隠しながら寝ていた。記憶も子供だった時なら、きつと笑顔を綻ばせて大いに喜びを口にしていただろう。

（寝心地いいと思つてしまった自分を殴りたい……）

雀と夕海子が横で面白がつているのを聞きながら、芽吹は早く元の体に戻りたいと……そして、あとで二人にはグラウンド百周させようと……そう強く思うのだった。